査読付論文（*Refereed Article*）

戦後地方博覧会における地域イメージの再構築
—南国宮崎博（1954）のケーススタディ—

The Reconstruction of Regional Images in Postwar Japan
– A Case Study on The Nangoku-Miyazaki Exposition, 1954 –

長谷川 司
Tsukasa Hasegawa

From the nineteenth to the mid-twentieth centuries, expositions were important events for nations and regions. Municipalities demonstrated their regional identity in local expositions. This paper analyzes a local exposition in order to clarify a process of altering the regional image in the postwar period of Japan. In 1954 Miyazaki Prefecture along with Miyazaki City held an exposition named Nangoku Miyazaki Sangyo Kanko (Industries and Tourism in Tropical Miyazaki). Through the exposition, the image of "Nangoku-Miyazaki (Tropical Miyazaki)" was created. By examining the expression techniques adopted to form such a tropical image, this paper discloses the hidden image of "Sokoku-Hyuga (Fatherland Hyuga)", which was closely related to fascism in prewar Japan. It concludes that the new image of "Nangoku-Miyazaki" represented in the postwar exposition was reconstructed from the past image of Miyazaki.

キーワード：地域イメージ、地方博覧会、南国宮崎産業観光大博覧会（1954）

Key Words ： Regional Image, Local Exposition, Nangoku-Miyazaki Sangyo Kanko Exposition

序

本論は、宮崎県がもつイメージ、宮崎イメージについて考察する。なかでも"南国"というイメージをテーマに取り上げる。「宮崎県」といえば、どんなイメージを抱くだろうか。東国原英夫知事や地鶏のもも焼き、高級マンゴーだろうか。太陽と青空、ヤシ樹が並ぶ熱帯のリゾート地を思わせる"南国"のイメージもその一つであろう。

メディアや観光の文脈で、宮崎イメージは毎日のように登場している。だがこれまで、こうした宮崎イメージを対象にした本格的な学術研究は少ない。そこで本研究は、宮崎イメージが変容しながらも、どのように形成されてきたかを問うていきたい。

まず本論では、戦後宮崎県の博覧会で表わされた"南国"イメージを事例にして考察をすすめていきたい。熱帯樹フェニックスが生い茂る「南国宮崎」、「日本のハワイ」といった南国観光地としてのイメージが宮崎に定着するのは、1945（昭和20）年以降のことだ。最大のきっかけになったのは、昭和40年代の宮崎への新婚旅行ブームである。だが、戦後に広まった"南国"という宮崎イメージは、昔からあったものではない。この"南国"イメージは、終戦直後からの大きな社会変容の中で構築されていったものである。いや、正確にいえば「再構築」されたものである。なぜなら、戦後に広まる宮崎の"南国"イメージは、戦前からあった

宮崎イメージを作り替えるなかで生み出されたものだからである。

戦前の宮崎は“南国”ではなく“皇祖ゆかりの地”だった。戦前から戦時期にかけての一連の県内イベントにおいては、“皇祖ゆかりの地”のイメージが発信し続けられた。記紀神話で、皇祖神が生まれ天孫ニニギノミコトが降臨し、初代神武天皇の故郷とされる「筑紫の国日向」。「日向」は宮崎地方の古称でもある。このことから、宮崎県は天皇の祖先の国を意味する「祖国日向」と自称し、県内の政策を統合していくと同時に、国家全体さらには中央政府に対して、「皇祖ゆかりの地」であることを誇示していった。こうした過程において生み出されたのが、宮崎・日向を「皇祖の国」であることを誇示する“祖国日向”イメージであった。

ところが1945(昭和20)年8月15日、8年あまりにわたる戦争が日本の敗北で終わった。もちろん、政治体制が天皇主権から国民主権へと移った戦後の日本において、“祖国日向”イメージを発信し、“皇祖発祥の地としての宮崎・日向”をアピールしていくことなどありえなかった。

その後、東西冷戦、朝鮮戦争をきっかけに日本国内の復興はすすみ、1950年代末には生活水準も戦前のピーク時を超えた。さらに1960年代末、高度経済成長の時代が始まった。こうした高度経済成長のなかで、宮崎県は大量の旅行客が訪れる大衆観光地となった。このときの観光キャッチフレーズは、「日本のハワイ、南国宮崎」である。

ほんの20年前までは、「皇祖ゆかりの地」と呼ばれた宮崎が、熱帯のリゾート地を思わせる観光地へと変貌を遂げていた。戦後の社会変容のなかで、宮崎県は、地域アイデンティティを新たな社会体制に合わせて再構築していったのである。こうした再構築の過程においては、地域内の政治、文化、社会が大きく変容を遂げた。そうした変容の具体的な方向性を決定づけたのが、観光を基幹とする産業体制であった。しかし、こうした産業体制は、ゼロから新しく創造されたのではない。昭和40年代の宮崎への観光ブームとりわけ新婚旅行ブームで人気を集めたのは、先行研究の多くが示すように、戦時期を通じて開発された観光地だったのである(白幡 1996、山口 2007)。

戦後の社会変容という大きな問題を一度に捉えるのは難しい。そこで、本論では、戦前から戦後しばらく、地域アイデンティティの表現の場として重要な意味をもった地方博覧会を取り上げる。戦後1954(昭和29)年の宮崎で開催された南国宮崎産業観光大博覧会である。「南国宮崎産業観光博覧会」(以下、「南国宮崎博」と記す)は、宮崎県ならびに県内各市町村と宮崎商工会議所が開催した地方博覧会(以下、地方博と記す)であった。

行政主体としての宮崎県と県内の各市町村が協力し、挙県一致で行われた博覧会は大博覧会という区別がなされている。宮崎県内で開催された大博覧会には、1933年の祖国日向産業博覧会と1954年の南国宮崎博があった。ここで重要と思われるのは、戦後に開催された博覧会で表現された宮崎イメージが、戦前・戦中期までとはまったく異なるものになっていたことである。

本論文では、とくに戦後、宮崎という地域社会が博覧会においてどのようにイメージを再構築していったのかについて考えていく。そこで本論が、どのような視点から探究を進めていくのかについて述べておきたい。南国宮崎博は、これまで様々な文献において言及されてきた。まず、南国宮崎博を宮崎の観光史的な立場から捉えた文献がある(宮崎市観光協会50年誌編集委員会編 1997、宮崎交通社史編纂委員会編 1997)。また、南国宮崎博を地方都市の形成過程のなかで捉えていく試みも行われている(田代 1996)。これらはこれまで、南国宮崎博が言及される際の主要な流れを形成し、それぞれ意義ある成果を挙げてきた。

こうした従来の文献は、宮崎県内のインフラ整備や都市化の進展さらに広い意味では、近代化

に果たした役割に焦点をあて記述されたものである。こうした文献は、本論執筆における多くの素材を提供するものである。しかし、これらは誘客効果や都市化への言及に終始しており、本論とは異なる視点に立っている。

歴史学、地理学、社会学といった諸分野において、博覧会研究はブームとも言える状況にある。本論はこれらの研究から多くを負っている。こうした研究は、博覧会をその開催効果に焦点をあてるのではなく、博覧会の開催自体をその内容分析によって明らかにするという特徴がある。本論もそうした立場をとり、博覧会の開催その内容について分析を進める。本論の視座に大きな影響を与えたのは、吉見(1992)、多田(2004)、倉(2006)といった社会学分野における博覧会研究である。

では、以下においては、戦後宮崎におけるイメージ変容はどのようにして起こったのか。いや、宮崎の人々の手によって、どのように再構築されていったのか、を問うていきたい。

1. “祖国日向”から“南国宮崎”へ

南国宮崎博が宮崎県で盛大に開催されたのは、1954(昭和29)年10月のことである。終戦から10年を迎えようとしていたこの時期、日本国内では産業振興を目的にした多くの地方博が開催されていた。この年には南国宮崎博を含めて、6つの地方博が開催されている(湯浅編 2005)。

1954年に宮崎全県を挙げての大博覧会を開催しようという動きが本格化するのは、開催の2年前に当たる1952(昭和27)年頃からである[1]。1952年には、県の予算に博覧会開催準備費が計上され、県産業奨励館内に準備委員会が設けられた。以後、国内各地の地方博が調査され、宮崎県での博覧会の開催案が立てられていく。こうした段階をへて、博覧会開催の専門家たちが総合会場設計を行い、会場工事が開始された。

会場建設は1954(昭和29)年8月10日に着工されたが、9月7日の大型台風によって会場内パビリオンの多くが破壊され、開催すらも危ぶまれた。しかし、連日の突貫工事により、なんとか開会式に間に合わされた。

こうして1954年10月15日、南国宮崎博は、宮崎市内船塚町において華々しく開幕を告げるのである。2万3千坪の会場には、29棟もの博覧会建物が建設された。10月15日から12月5日までの52日間の会期で、入場者はのべ約40万人。一日の平均は約7600人、11月21日には22261人の最高入場者数を記録している。

終戦から9年後、この博覧会の開催をつうじて宮崎県は県内において「観光立県」という政策アイデンティティの基礎を築き、県外に対しては“南国宮崎”という観光地のイメージを発信していく。

とはいえ、南国宮崎博が宮崎県で初めての地方博だったのではない。すでに戦前の宮崎市においては、祖国日向産業博覧会(1933)、支那事変博覧会(1938)、日向建国博覧会(1940)といった大小の博覧会が開催されていた(倉 2006：55)。

なかでも1933(昭和8)年には祖国日向産業博覧会(以下、「祖国日向博」と記す)が催されている。この博覧会は、南国宮崎博と同じく、宮崎県と県内各市町村の共催で開かれた産業大博覧会であった。そこで1954年の南国宮崎博は、21年ぶりの大博覧会の開催ということになった。

しかし、同じ産業大博覧会であったとしても、南国宮崎博は祖国日向博とまったく異なるものだったと言える。1933(昭和8)年の祖国日向博は、産業振興と県内の聖蹟(神武天皇ゆかりの神社や遺跡)を全国に顕彰するための博覧会という性格をもっていた。この博覧会において、開催者たち

1　宮崎県での博覧会開催の計画が持ち上がったのは、1951(昭和26)年、県の産業奨励館の移転問題をきっかけにしてのことであった。そしてこの博覧会の開催計画は、県の議会にかけられ、宮崎県、宮崎市、宮崎商工会議所を中心に県内各市町村の共同主催という挙県一致の開催体制が整えられた。



図1　会場鳥瞰（児玉編 1957：26-27）

は宮崎を天皇の祖先の国「祖国日向」と呼び、全国に発信されたのは、“皇祖ゆかりの地”という宮崎のイメージであった。このイメージの発信をつうじて、宮崎は天皇制国家における聖地であることを全国にアピールしつつ、あわせて県内の産業振興をはかろうとしたのである。

それに対して、1954（昭和29）年の南国宮崎博で強調されたのは、“南国宮崎”というイメージだった。異なっていたのは、博覧会の開催をつうじて表現された地域表象の違いである。こうしたイメージの違いが、1954年の産業博覧会を過去のものとはまったく異なる性格にした。

2. 南国宮崎博の会場

さて、それでは南国宮崎博の会場の内部を概観していくことにしよう。南北に伸びた博覧会場の内部は、順路に沿って内回りに開催者が設営した17棟のパビリオン、外回りに外国政府、他府県、民間企業による12棟の特設館に割り当てられていた（図2）。

2.1　宮崎の未来―過去・現在・未来

南国宮崎博の展示の多くに共通していた主要な考え方は、この産業博覧会を、“宮崎の未来”を示す場として提示していこうというものであった。この博覧会の展示を貫通していたのは、過去、現在そして未来へという時系列的な表現である。実際、博覧会の総合計画を記した文章に見られるのは、「伸びゆく」「未来」といった未来志向の表現である。博覧会の総合計画は次のように記されている。

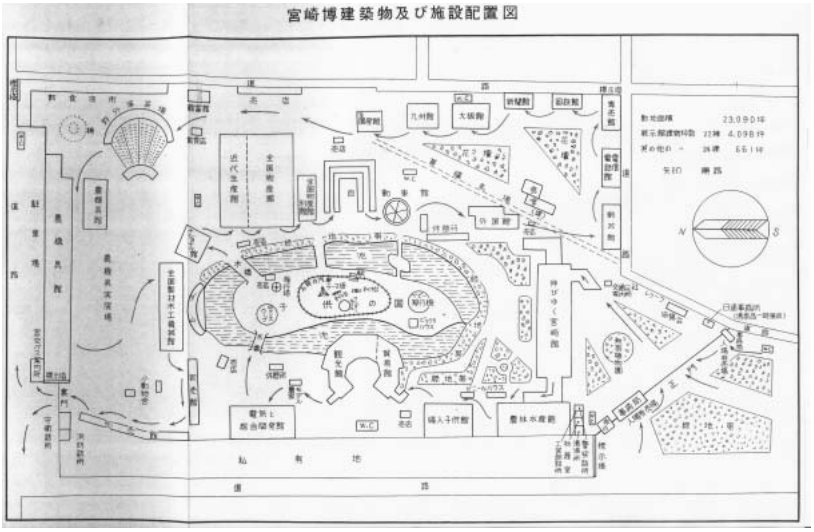


図2　会場配置図（児玉編 1957）

開催者館
　伸びゆく宮崎館、農林水産館、婦人子供館、貿易館、観光館、電気と総合開発館、近代生産館、全国物産館同別館、農機具館、即売館、モデル農家、野外演芸場、子供の国、鶴富屋敷、農機具実演場、食堂、小動物舎

特設館
　自動者館、外国館、郵政館、電信電話館、専売館、国鉄館、新聞館、大阪館、九州館、ナショナル館、全国製材木工機械館、国産本館

骨子は、過去と現在の努力によって培われた、南国宮崎の未来の希望を展観する。
即ち、三つの部を基本として構成する。
(1)現在―現在の産業と観光を中心とする展観
(2)過去―古くからあるものを系統的に展観する。
(3)未来―古いものと新しいものとの総合によって、生み出す未来への希望を展観する。
（児玉編 1957：121）

総合計画を見ても明らかなように、この博覧会のテーマは、過去、現在に培われた地域資源を活用しながら、未来への展望を開くという時系列的なものであった。

博覧会の基本テーマの作成、展示計画において重要な役割を果たしたのが、小池新二（千葉大学教授）、柏崎栄助（デザイナー）、福田良一（東京芸術大学講師）という博覧会開催の専門家たちである。彼らは南国宮崎博だけではなく、他の地方博にも携わっている。さらに、基本計画を設定するうえで、開催者たちは国内各地で催された博覧会を調査してもいる。これらのことから、テーマを時系列的に展開することは、他の地方博覧会と共通のものと考えられる。しかし、テーマ設定、展開方法が当時の流行のものであったとしても、開催者たちは宮崎県ならではの独自性すなわち宮崎の地域アイデンティティを表現しようとした。

2.2 伸びゆく宮崎館
(「神話と伝説の古代日向から近代文化建設への巨歩を進める南国宮崎」)

入場門の正面、来観者たちが一番に観覧するのが、伸びゆく宮崎館であった。この館では、「古代神話時代から現在に至る迄の過程」の政治、産業、文化の各分野を示す展示が行われた。館内展示は、過去、現在、将来の三部からなる。

過去の部に展示されていたのは、図表、県内で発見された土器さらには記紀神話をモチーフにした「神武天皇御東遷」ジオラマであった。

現在編は、県内の現勢を示す展開である。県内の産業、工業の現状、人口分布、自然地理条件などがグラフと写真で示されており、さらには県内の産業製品が展示された。

そして未来編では、電源開発がすすみ、電化製品が普及し、都市インフラ整備が完了した50年100年後の宮崎市の都市ジオラマ「未来の宮崎」が展示された。

過去、現在そして未来へと至る展示の流れは、時系列的な歴史をたどり、神話に記された「日向」から現在そして未来の「宮崎」への歴史過程を描き出している。

伸びゆく宮崎館内は、神話に描かれた“日向”に始まり、進歩が切り開くであろう未来の“宮崎”で終わる。

ただ、こうした展示の始まりが、「神武御東遷」ジオラマという神話ジオラマであったことに注意したい。もしも戦前の博覧会であれば、このジオラマは“皇祖ゆかりの地”としての宮崎を表現するために展示されたであろう[2]。

しかし、戦後博覧会の「神武天皇御東遷」ジオラマは、時系列的な構成をもつ館内展示の過去編に位置づけられていた。こうした構成からみれば、



図3　神武天皇御東遷ジオラマ(児玉編 1957)

館内展示は、神武東征後の歴史を描いたものであったのである。そして出口、「未来の宮崎」大ジオラマで伸びゆく宮崎館の展示は終わる。50年後か100年先の宮崎市が背景画と都市ミニチュアの大ジオラマで具現されていた。

つまり、たしかに展示のテーマは、10年前までの「祖国日向」や「戦争」から「南国宮崎」や「観光」に変わったものの、展示内容としては、戦前までのものがそのまま踏襲されていたのである。

3. “南国宮崎”

南国宮崎博の会場となったのは宮崎市船塚町[3]、宮崎大学のグラウンドとして整備予定であった敷地である。会場の正面庭園そして場内の至る所に設けられた緑地帯には、フェニックス、サボテン、バショウ、ソテツといった「南国宮崎」を印象づけるために熱帯植物が植え込まれていた。熱帯植物に彩られた会場は、来場者たちに南国情緒を感じさせるものであった。

開催ポスターに見られる(ビロー樹、サボテン)(図4)、会場の熱帯植物。こうした植物のなかでも熱帯原産のフェニックスは、宮崎県の県木として知られ、県内の日南海岸の堀切峠はフェニックスの名所である。もちろん、フェニックスは県内自生の植物ではない。堀切峠のフェニックスは、

2　実際、1933年の祖国日向博の祖国館では、『古事記』『日本書紀』に記される日向を舞台にした「日向神話」パノラマが展示された。
3　現在は宮崎大学のグラウンドになっている。



図4　開催ポスター
（児玉編 1957）



図5　正面庭園（児玉編 1957：78）

戦前であった昭和10（1934）年から宮崎交通という地元バス会社によって植えられたものである。このフェニックスの苗木を育てていたのが、宮崎市内の中村園芸場であった。そして、南国宮崎博会場の造園に用いられた熱帯植物の多くも、中村園芸場が準備したものであった（児玉編 1957：218）。

より大きな視点から捉え返すなら、中村園芸場の起用には、必然的ともいえる背景があった。それはなによりも、フェニックスの植樹技術を確立したのが、中村園芸場であったことにある。

日南海岸の観光開発、他方では、博覧会における熱帯植物の植栽。両者には、視覚によって捉えられるイメージを空間演出に利用したという共通点がある。生い茂る熱帯の植物によって演出された博覧会場への展開を可能にしたのは、それまでに確立されてきた植樹技術によるものであった。

中村園芸場と宮崎における観光開発との結びつきが示すように、南国博の会場の原型は県内の観光地、日南海岸にある。実際、南国宮崎博の会場は、この日南海岸をそのまま縮小させたものとも見なしうるのである。

会場に植栽された植物は、熱帯に繁茂しているがゆえに熱帯植物なのではない。厳密に言えば、熱帯地方を原産地にした園芸樹である。この園芸樹が熱帯を感じさせるとすれば、それはこの樹がもつ視覚イメージによるものなのである。それと同じく、この博覧会は、南国で開催される博覧会であるから「南国宮崎博」なのではない。そうではなく、会場外の観光地と同じく、植物がもつ視覚イメージを通じて“南国”を感じさせる空間であるという意味において“南国”の博覧会なのである。

“南国”イメージが演出された博覧会空間に、日本国内各地さらには外国から集められてきた展示物が陳列された。会場の至る所に植えられた熱帯の植物は、そうしたことを象徴的に示していた。“南国”イメージはいまや人工的に演出することが可能である。しかもこのイメージは熱帯植物が植えられる所でありさえすれば、無限に延長可能であった。

やがて“観光立県”を掲げ大規模な観光開発がおこなわれる宮崎県において、この可能性は現実のものとなったと言うことができる。しかし先に急ぐのは止めておこう。ここでは、博覧会の会場演出と観光地における空間演出の共通点の指摘のみにとどめておく。つまり、この南国宮崎博の会場は、その空間的な演出技法において観光地開発と共通の基盤の上に成立していたのだ。

3.1 「南国」の意味

ところで、この「南国宮崎産業観光博覧会」という名称における「南国」の意味について考えてみたい。県内の自然を紹介する展示において、ソテツやビロー樹などの亜熱帯植物が県南部に自生することが言及されている。しかし、この「南国」が意味するのは、宮崎県がただ自然地理的に日本の南に位置するというだけではなかった。博覧会の名称について、次のような記録がある。

〔1〕博覧会開催について、その名称を如何に定めるかと云うことは、本博覧会の企画上重要なことの一つであった。故に、発起人始め関係者は、この名称について慎重に研究した。
〔2〕本博覧会の主たる目的が、本県の産業の振興にある以上、その名称中に産業の文字がはいることは当然である。しかし又、宮崎県での開催である本博覧会に、観光を除外できないことも、識者の認めるところである。
〔3〕けだし、宮崎県が近来観光面において、著しく名声をあげていることを思えば、その必要なことがうなずけるであろう。
〔4〕そこで、始めは月並に宮崎産業観光大博覧会と呼ぶことが考えられたが、観光で宮崎が売り出したのは、何と云っても青島である。
〔5〕終戦後沖縄や台湾を失った日本人に、熱帯樹茂る青島は、相当の魅力となっており、又日本民族の血液の中には、南方への懐古性が流れていることも識者の述べるところである。
〔6〕この間の事情を汲み、更に本博覧会の宣伝価値を高めるため、先の案に南国と云う文字を冠し、南国宮崎産業観光大博覧会と云う名称をつけ、これを四月二日の発起人会に諮って、その承認をうけた。

（児玉編 1957：108）

※段落の番号と下線は筆者による。

段落〔1〕から〔3〕に示されるのは、この博覧会における「観光」「産業」の位置づけである。この博覧会において、宮崎県が観光事業を県の産業政策として位置づける表明を行ったものと捉えられる。つぎに、〔4〕から〔6〕段落である。ここで述べられているのが、博覧会の名称中に、「南国」が付け加えられた理由である。まず、〔4〕から〔5〕では、その理由として「青島」の名前が挙げられている。熱帯樹ビロー樹が生い茂る青島は、県内有数の観光名所である。

では、なぜ青島なのか。〔5〕段落の下線部に記されている。青島が「終戦後沖縄や台湾を失った日本人」にとって魅力があるうえに、「日本民族」には「南方への懐古性」が流れていると「識者」も述べている。このことが、宣伝価値を高めるため、博覧会の名称に「南国」という文字を加えた理由なのだという〔6〕。

つまり「南国」とは、「青島」の熱帯樹が持っているものであり、「南方への懐古性」をもちながらも沖縄や台湾を失った「終戦後の日本人」「日本民族」にとって魅力をもつものと意識されている。

会場全体として見るならば、南国宮崎博は、未来の姿を提示する時系列的なテーマ構成、植栽による“南国”演出、によって統一されてもいた。だが同時に、こうした統一が、あくまで事態の一面にすぎなかったのも事実である。南国宮崎博を訪れた大衆は、そこに単なる“南国宮崎”の輝かしい未来以上のものを見た。開催者たちが南国宮崎博において人々に示したのは、かつては“皇祖発祥の地”と呼ばれた宮崎県が “南国宮崎”として生まれ変わろうとしているという過渡的な姿であった。

南国宮崎博の開催が、戦後の宮崎県の地域イメージを、戦前・戦中の宮崎が持った“皇祖発祥の地”から“南国宮崎”におそらく意図的に変えたことは疑いえない。

南国宮崎博とは、縮小された当時の宮崎県つま

りは“南国宮崎”の姿にほかならなった。しかしさらに、“南国宮崎”が人々に新しいものとして受け入れられたのだとすれば、それはかつてあったものが大きな変容を遂げていることの表れだったのである。

4.「平和の塔」

熱帯植物の植え込みによって、“南国”演出がほどこされた会場には、近代的な意匠をもったパビリオンが仮設されていた。入場者たちによって感受される“南国”が演出された空間は、県内の観光地や都市の至る所に広がっていたものである。

そして、この“南国宮崎”を体現したかのような会場においては、“宮崎の未来”も表現されていた。産業振興が切り拓く未来像が提示されていく会場。ナショナル館、自動車館などの企業パビリオンでは、最新の家電製品や人気の自動車が展示されていた。人工池の中之島には、飛行塔、お猿の汽車、ロマンスウェーブ、ワンダーホイルなどの遊具が置かれ、子供たちで賑わったという。

第二次世界大戦の終戦から10年が経とうとしていた。平和産業としての観光、最新の工業技術と製品、娯楽アトラクション。戦争は、はるか昔の出来事のようであった。だが、ここで指摘しておきたいのは、来場した人々の視線があくまでも“南国”や“未来”の背後に、“皇祖発祥の地”としての宮崎県すなわち“祖国日向”に注がれていたことである。会場を訪れる人々の視線は、未来へ向けられていた。しかしその背後には、過去の宮崎が表現されてもいた。そのことを表していたのが、視覚構成の中心にあった「平和の塔」である。

4.1　宮崎のシンボルとしての「平和の塔」

開催者たちは、宮崎市内船塚町を会場地に選んだ。選定理由として記録されているのは、この敷地が宮崎大学のグラウンド予定地であり、将来買収が必要であったということだけである（児玉編 1957：109）。しかし、その眺望計画を調べてみると、もうひとつの選定理由があったことが分かる。

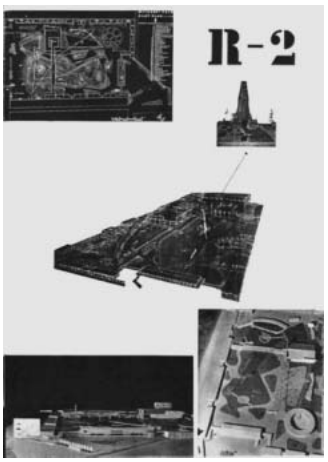


図6　会場設計図（造形教育研究会編 1954）

ここに、博覧会場をデザインした柏崎栄助が記した会場計画図がある（図6）。南から北へ広がる会場には一本の「→」が引かれている[4]。図上、会場をまっすぐに伸びる矢印がひとつのモニュメントを指し示している。

矢印の先にあるのは、「平和の塔」である。会場から北へ約3Km。下北方町の丘陵にあるこの塔は、正門を入ると、真正面に見えていた。前面には熱帯植物園と伸びゆく宮崎館が位置し、その背景に塔がそびえるという構図である。塔が、正門、伸びゆく宮崎館、テーマ塔を結ぶ延長線上に

4　会場計画を記した文には次のようにある。「入場最初に**宮崎館**へ導く。先ず県勢の印象を強く植え付ける。廻廊北側は全会場を一望に納め、各館の所在が判り、生きた案内図として巡覧の予備知識を与える。宮崎館は、日向のシンボル平和の塔とテーマーセンターを結ぶ軸線上に位置し、当会場でなければ得られない絶好の条件で日向の印象を与える」（児玉編 1957：124）

あり、会場の視覚構成の中心にあったことが分かる。

しかしその一方、「平和の塔」は、南国宮崎博の視覚的なオブジェにとどまらない。その意味づけからいえば、この塔は宮崎のシンボル、戦後宮崎を象徴するモニュメントでもあったからである。

4.2 「八紘之基柱」から「平和の塔」へ

ここでいう「平和の塔」は、もともと1940(昭和15)年に建設された記念塔である。1872(明治5)年、大日本帝国政府は、天皇制国家の独自の紀年法として皇紀(神武天皇即位紀元)を法制化した。この皇紀では、初代天皇(神武天皇)の即位年を皇紀元年、西暦にして紀元前660年のことと定められる。このことから1940(昭和15)年は建国から2600年たった年とされ、日本政府は紀元二千六百年を記念する祝典を執り行い、国内地方は記念事業を展開していった。

そうした全国で紀元二千六百年奉祝事業が行われるなかで、宮崎県は独自の事業として記念モニュメント「八紘之基柱(あめつちのもとばしら)」を建設する。

南国宮崎博の会場になった舩塚町の北、下北方に立つ塔の高さは、36.4メートル。正面に「八紘一宇」と刻まれた塔の四隅には、荒御魂(あらみたま)(武人像)、幸御魂(さきみたま)(農人像)、和御魂(にぎみたま)(工人像)、奇御魂(くしみたま)(漁人像)、それぞれ農・工・商・漁・戦の神をかたどった像が配置されている。1945(昭和20)年の終戦を迎えるまで、この塔は「八紘之基柱(あめつちのもとばしら)[5]」と呼ばれていた。

日本神話に記された神武天皇の「八紘為宇」に由来する「八紘一宇[6]」が刻まれたように、「平和の塔」は神武天皇の創業にちなんだモニュメントである。宮崎県はこの塔を創り、皇祖ゆかりの地、天皇制国家の聖地ともいえる“祖国日向”であること誇示しようとした。つまり、塔自体は、もともと“皇祖発祥の地”を全国とりわけ中央政府に誇示するための記念モニュメントにほかならなかったのだ。

しかし戦後、この塔に与えられた意味づけは



図7　平和の塔
(筆者撮影 2008年)



図8　開催当時の平和の塔＊
(絵はがき「宮崎名勝」昭和30年代のもの)
＊「八紘一宇」の文字、正面向かって左の武人像が無い。

5　もしくは「八紘一宇の塔」とも呼ばれた。

6　「八紘一宇」は、日本神話に記されたものではなく、神話を典拠とした語である。この「八紘一宇」は、田中智学によって作られたものである。

一転する。「八紘之基柱」の呼び名が「平和の塔」へと変貌するのは、終戦後のことである。いつからか「平和の塔」と呼ばれるようになったのだという(「平和の塔」の史実を考える会編 1995)。さらに、この記念塔からは、終戦後1946(昭和22)年に、「八紘一宇」の文字は削りとられ、武人像は破壊された。「八紘之基柱」は、「八紘一宇」の文字が消され武人像を失い、「平和の塔」へと変貌を遂げたのである。博覧会当時、会場から遠方に眺められたのは、武人像と「八紘一宇」の文字を失った「平和の塔」の姿だった。

南国宮崎博は、産業発展を遂げた宮崎の“未来”、“南国”観光地としてのイメージを人々に示した。こうした博覧会において、戦前に「皇祖ゆかりの地」を表現したモニュメントが、戦後に新しい意味を与えられ、再び宮崎県をシンボライズする役割を担ったと考えたほうがよいであろう。南国宮崎博の視覚構成における「平和の塔」は、「祖国日向から南国宮崎へ」の移行過程を典型的に表している。

4.3　熱帯植物に囲まれた「平和の塔」

図9は、開催中の博覧会場で販売された煙草「ひかり」のパッケージである。パッケージの絵柄は一般公募され、一位に入賞した図案が採用された。その説明には、「博覧会建物と南国特有のビロー樹を配し」(児玉編 1957：200)たものとある。

たしかに、建物を囲むツバメの尾のように尖った葉をもつ樹は、ビローのようでもある。しかし、樹々に囲まれているのは、博覧会建物ではない。明らかに、「平和の塔」である。光に照らされた塔に武人像はない。このことから、博覧会当時の「平和の塔」であることが分かる。興味深いのは、その建設から現在まで、塔が立つ場所に熱帯樹が植栽されたことがないことである。そこで絵が表しているのは、まったく架空の風景である。

その一方で、“南国”演出が行われた会場からは、塔を真正面に眺められた。近景には熱帯植物に彩られた会場、その先、遠景にそびえる「平和の塔」という会場の視覚構成は、念入りに計画されたものであった。つまりは、この熱帯植物に囲まれた「平和の塔」という煙草の絵柄は、開催者たちの意図を反映したものなのである。

次のように言える。南国博の開催者たちは、その遠近法的な視覚構成のなかで、戦時中のモニュメントがもつ意味づけを読み替えたのである。そうすることで戦前の“祖国日向”的な事物を戦後の



図9　南国宮崎博 記念たばこ「光」パッケージ(所蔵：乃村工藝社)
「光の構図上半分に博覧会建物と南国特有のビロー樹を配し、南国情緒の深いもの」
(児玉編 1957：200)

“南国宮崎”のモニュメントに変えた。

塔は、戦後の宮崎社会を象徴するものであった。先にふれたように、実際、この博覧会の会場計画において「平和の塔」は、宮崎を象徴するシンボルとして位置づけられていた（児玉編 1957：11）。「平和の塔」というその名称からすれば、「戦争の時代」から「平和な時代」への変容を遂げた戦後社会を象徴するものだったと言えるだろう。さらに、この南国宮崎博の会場では、フェニックスやビロー樹といった熱帯原産の植物が移植され“南国”のイメージが演出されていた。しかし、むしろこの博覧会が人々に示していったのは、戦中をつうじて構築されていった事物に新たな意味づけが与えられていくという戦後的な変容のイメージであった。

このようにしてみると、南国宮崎博は、戦後の社会変容を象徴的に体現してもいたのである。つまり、南国宮崎博の開催には、一方では、戦中の記念碑的建造物の意味の読み替え、他方では新たなイメージを演出するという二重の運動が内包されていたのだ。

結

以上、本論では南国宮崎博における“南国”イメージについて見てきた。この博覧会において、“南国”は熱帯植物がもつ視覚イメージによるものであった。これは非常に単純な結果である。興味深いのは、この南国イメージが置かれた戦後の文脈である。南国宮崎博は会場にやってきた人々に、「宮崎の未来」「南国宮崎」の姿を提示した。しかしこの「未来」「南国」は、あくまでも、過去と現在の事物を読み替える中で表現されたものであった。さらにいえば、この博覧会において提示されていたのは、「かわりつつある」宮崎の過渡的な姿であったのである。

多くの著作において、この“南国”イメージが「つくられたもの」「あたらしいもの」であると強調される。しかし、本当に重要なことは、古い地域イメージが新しいイメージへと変容する際の構造調整だったのではないだろうか。

本論はこの構造調整を、戦前の事物の意味づけの読み替えとして記述した。この読み替え過程を“皇祖ゆかりの聖地”すなわち「祖国日向」から“南国観光地”「南国宮崎」へという時代の移行、さらには単純な観光イメージ戦略の転換と考えてはならないだろう。「つくられたもの」「あたらしいもの」と考えることは、歴史のある時点における「かわらないもの」「ふるいもの」が変容していくことの必然的結果だったのである。

こうした角度から見れば、南国宮崎博は、戦後の社会変容のただなかで開催された催しであった。これほどまでに、戦後の読み替え過程を体現したイベントも少ない。1954年の博覧会に見られた“南国”イメージの演出ほど典型的な例証はないだろう。

謝辞

貴重な博覧会コレクションの閲覧と複写転載を許可して下さった（株）乃村工藝社および情報資料室の石川敦子さん。宮崎公立大学准教授の倉真一先生からは貴重なご意見を多々戴いた。また、児玉親雄氏が編まれた詳細な協賛会誌がなければ、本論の執筆はできなかった。執筆前に、編者の御子息、児玉光高氏にお会いできたことは、大きな励みになった。記して感謝したい。

【参考文献・資料】

＜文献＞

井上章一、1987、『アート・キッチュ・ジャパネスク』青土社

井上章一、2006、『夢と魅惑の全体主義』文藝春秋

小川全夫、1979、『よだきぼの世界』鉱脈社

君島仁彦編、『平和概念の再検討と戦争遺跡』明石書店、2006年

倉真一、2006、「博覧会からみた宮崎の近代」宮崎公立大学編集委員会編『地域を創る―新しい宮崎をめざして』鉱脈社、pp.55-79

児玉親雄編、1957、『南國宮崎博記念誌』南国宮崎産業観光大博覧会

坂上康俊ほか、1999、『宮崎県の歴史』山川出版社

白幡洋三郎、1996、『旅行ノススメ―昭和が生んだ庶民の「新文化」』中央公論新社

千田稔、1999、『高千穂幻想―「国家」を背負った風景』PHP研究所

田代学、1996、『地図からみた宮崎市街成立史』江跡庵

多田治、2004、『沖縄イメージの誕生―青い海のカルチュラル・スタディーズ』東洋経済新報社

原田解、2004、『ひえつき節の二十世紀―二十六文字がつづる秘境物語』鉱脈社

宮崎市観光協会50周年誌編集委員会、1997、『みやざきの観光物語』宮崎市観光協会

古川隆久、1998、『皇紀・万博・オリンピック―皇室ブランドと経済発展』中央公論新社

別府俊紘ほか、1992、『宮崎県の百年』山川出版社

宮崎交通社史編纂室編、1997、『宮崎交通七十年史』宮崎交通株式会社

山口誠、2007、『グアムと日本人―戦争を埋め立てた楽園』岩波書店

湯原公浩編、2005、『日本の博覧会―寺下勍コレクション』平凡社

吉見俊哉、1992、『博覧会の政治学―まなざしの近代』中央公論新社

吉見俊哉、2005、『万博幻想―戦後政治の呪縛』筑摩書房

＜資料＞

高橋春人 編、1954、『観光アルバム 南国日向』日向文化総合研究会

造形教育研究会 編、1954、『デザイン教育講座―新しいスタイルの形成』美術出版社

南国宮崎博記念煙草「ひかり」パッケージ、(株)乃村工藝社所蔵